

## 『信長公記』と小牧山城～信長の奇特なる御巧み～

日本城郭協会学術委員 小野友記子

### 織田信長の小牧山城

私が調査を担当している小牧山城（国史跡小牧山・続日本 100 名城）は 1584（天正 12）年に小牧・長久手の戦いで織田信雄・徳川家康の本陣となったことが知られていますが、それを遡ること 21 年前の 1563（永禄 6）年に織田信長が築き、岐阜に移るまで 4 年間居城とした城でもあります。史跡整備のため 2004（平成 16）年から続く主郭地区の発掘調査では織田信長築城段階と推定される石垣が次々と見つかり、その成果については、以前『城郭ニュース 135 号』やお城 EXPO2018 のセミナー等でご紹介をさせていただいたところです。（図－1）



図－1 小牧山城イメージ CG

信長の事績を記録した同時代史料『信長公記』には、小牧山城築城にまつわるエピソードが 1 箇所だけ記されています。

### 『信長公記』首巻「二宮山御こしあるべきの事」

一、上総介信長奇特なる御巧みこれあり。清州と云ふ所は国仲、真中にて、富貴の地なり。或る時、御内衆悉召し列れられ、山中高山、二の宮山へ御あがりなされ、此の山にて御要害仰せ付けられ候はんと上意にて、皆々、家宅引き越し候へと御詫候、爰の嶺、かしの谷合を、誰々こしらへ候へと、御屋敷下され、其の日御帰り、又、急ぎ御出あつて、弥、右の趣御詫候。此の山中へ清州の家宅引き越すべき事、難儀の仕合せなりと、上下迷

惑大形ならず。左候ところ、後に小牧山へ御越し候はんと仰せ出だされ候。小真木山へは、ふもとまで川つゞきにて、資財雑具取り候に自由の地にて候なり。□※と悦んで罷り越し候ひしなり。是も始めより仰せ出だされ候はゞ、爰も迷惑同前たるべし。小真木山並びに御敵城於久地と申し候て、廿町計り隔てこれあり。御要害、ひたひたと出来を、見申し候て、御城下の事に候へば、拘へ難く存知、渡し進上候て、御敵城犬山へ一城に楯籠り候なり。

(太田牛一・桑田忠親校注『新訂 信長公記』新人物往来社 1997年) ※口偏に童

筆者の太田牛一は清須(愛知県清須市)を「富貴の地」と評しています。一方で、小牧山周辺は主要な街道にも沿わず、地勢的にはあまり魅力のない土地とみなされていたようです。濃尾平野を一望できる独立丘陵でありながら、信長が築城するまで手付かずであった小牧山に信長が新たな城を築くことを太田牛一は「奇特なる御巧み」と表現しています。

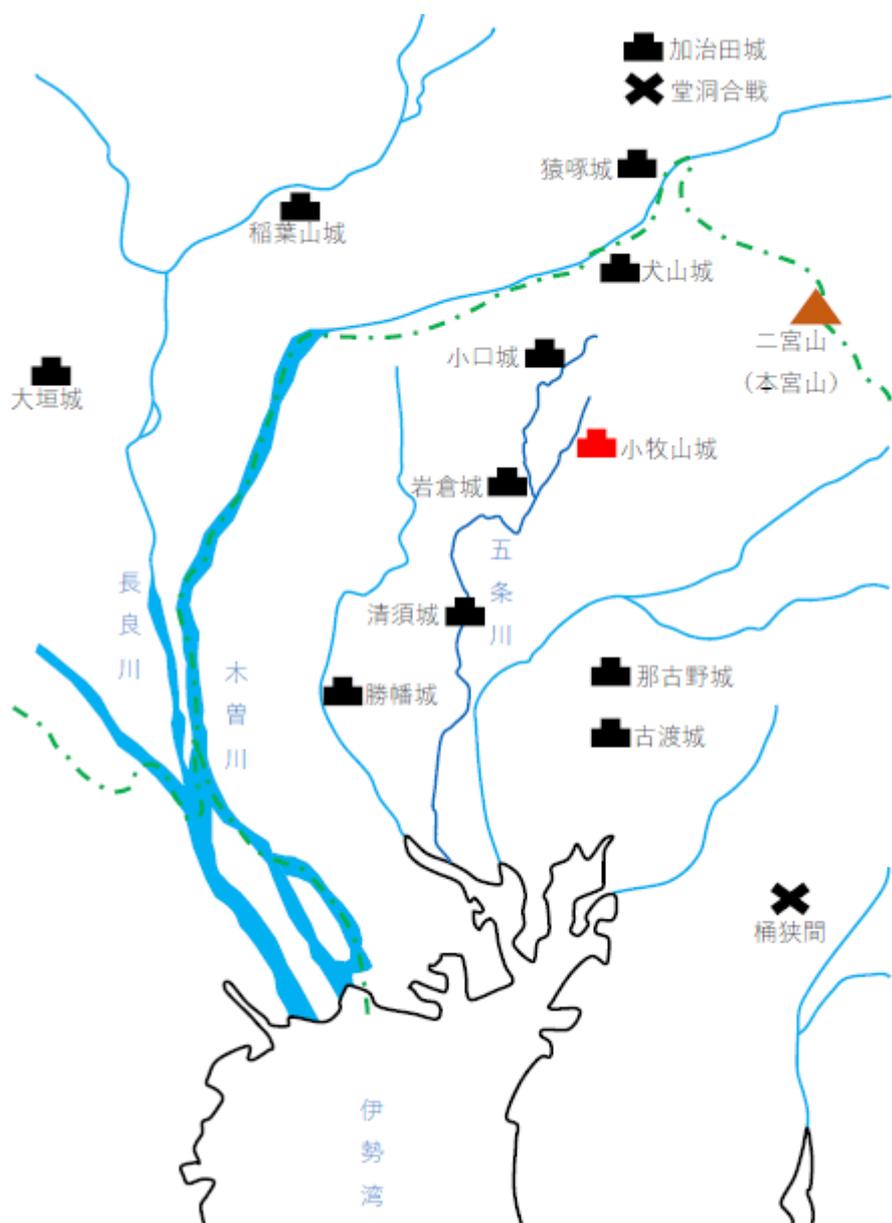
これは従来、小牧山城への居城移転をスムーズに実行するための織田家中に対する人心操作の巧妙さを書き上げたものと理解されています。つまり、信長は家臣が難色を示すことを承知の上で先に遠方で難所の二宮山(本宮山・愛知県犬山市)を移転候補地として挙げ、その後に二宮山よりも諸条件の良い小牧山に移転先を変更したように見せかけて、居城移転という本意を遂げたのだ、というものです。

しかし、調査で判明した小牧山城と小牧山城下町の様相や当時の尾張・美濃両国を取り巻く状況を合わせて検討すると、『信長公記』が評している信長の「奇特なる御巧み」は、単に清須から小牧への居城移転にとどまらず、30歳の信長が初めて築城した城・小牧山城を効果的に利用した美濃戦略の布石となる多くの要素を含んでいることが読み取れるのです。ここでは、『信長公記』「二宮山御こしあるべきの事」の記述と小牧山城、小牧山城下町での調査成果とを比較しながら、その「御巧み」とは何かを考えてみたいと思います。

## 御巧みその1 ～場所の選定～

当時尾張の国の中心地であった清須から小牧山への拠点移動の背景には、信長の美濃攻略の戦略的大転換があったと考えられます。つまり、父信秀以来の、清須から大垣を経て稲葉山城に攻め込む「西美濃ルート」から小

牧、犬山から木曾川を渡る「東美濃ルート」への転換です。(図一2) このルート転換の大方針が確固とした意図に基づくことは、信長が小牧山に先立つ居城移転候補地として、二宮山を提示したことからも明らかです。この攻略ルートの転換により、東美濃地域は稲葉山城の後詰から前線に強制転換されることとなりました。小牧山城移転直後に勃発する堂洞合戦を含む一連の流れは、この急激な転換に対応を迫られた東美濃側の動きとして理解できます。信長は居城を移すだけで相手方に大きな動揺を与えることに成功したのです。一方信長にとっては、長年にわたって膠着していた対美濃戦略を打破するため、富貴の地（清須）を手放す覚悟で臨んだ一大決心、それが小牧山築城だったのです。



図一2 信長の美濃攻略ルートと城郭等

## 御巧みその2 ～石垣の採用～

信長の築城した小牧山城には、石垣という新しい建築要素が加えられました。調査で確認された石垣は山頂の主郭を囲むように、巨石を用い、幾重にも段築されていました。(写真-1) 段築の石垣は、下から見上げた時にあたかも一続きの高石垣のような外観を呈していたと推定されます。これは、城郭本体の強化もさることながら、これまでの尾張国内にはない石垣を備えた城を「見せる」ことも目的の一つだったのではないかと考えられます。「見せる」機能が付加された小牧山城、信長の城づくりの効果が劇的であったことは、『信長公記』当該条の末尾からも窺えます。

小牧山城からほど近い小口城（愛知県丹羽郡大口町）は、当時信長の勢力圏外でした。信長は1560（永禄3）年に小口城を攻めますが攻略には失敗しています。しかし1563（永禄6）年、小牧山城が徐々に出来上がる様子を「見申し候て」、小口城勢は「拘え難し」と城を捨て、犬山に移動しています。信長の手がけた小牧山城は建設中にもかかわらず、見た目だけで敵方を退却させてしまうような大きな脅威とインパクトを与えたこととなります。これこそ、小牧山に出現した、当時の人々が目にしたことのない「石の要塞」の外観の効果であり、見せることによって戦闘意欲を削ぐという、「抑止力」としての機能が新たに城に追加されたことを示しているのです。



写真-1 小牧山城主郭の段築石垣



## おわりに

小牧山城と城下町の発掘調査成果は、現代人にとっては当たり前、石垣や天守などを用いた「見せる」城とその足下に展開する城下町という姿が、信長の手により小牧で出現したことを示しています。

信長の小牧への居城移転は、従来の姿に捉われない新しい城と町を具現化させ、尾張の国の政治・軍事と経済の中心を清須から小牧へと移す、いわば「尾張国首都移転構想」に基づく一大事業だったと評価できます。

『信長公記』の当該条と発掘調査が示す小牧山城と城下町の状況は見事に連関しています。太田牛一の記述からは、単なる城の移転の際の家臣の心理操作だけでなく、場所の転換・城郭の転換・城下町の転換を実現したこの壮大な構想こそが信長の「御巧み」であったと読み取ることができるのです。(図-1・3、写真-1 画像提供：小牧市教育委員会)

(公財) 日本城郭協会会報「城郭ニュース」第 148 号より